

## フォークナーの「三部作」について フレム・スノーブスのルーツを探り、 そのアメリカ性を証明すること

古 富 猛

### (1)

ウィリアム・フォークナーの後期の作品である通称「3部作」と呼ばれている『村』、『町』、『館』は、究めて難解な作品群と言える。もともと筆者はこれまでの作品について小論をしたためてきた。そして彼がモダニストとして、いわば時代の潮流にのらんとすべく、その作品の構成に独自性を持たせるために苦闘したと論じた。それは『響きと怒り』しかり、『八月の光』しかり、『アブサロム！アブサロム！』しかりであった。それらはすべて長編であるが、中編の『サンクチュアリ』も彼なりの手法を登場人物に駆使して、その世界を創り上げた。そのすべてはヨクナパトーフア・サガと呼ばれているものであり、アメリカ南部の差別社会を、克明に描き、その矛盾を孕んでいるが故の、暴力、殺人、レイプ等のテーマを提起し、架空の町ジェファーソンを創造することでリアリズムを持たせることに成功したと思われる。

すでに筆者はそれぞれ作品の手法や主人公のキャラクター等について、それなりに論じてきたが、近年ではフォークナーが精力を注いで、創り上げた殺人者に焦点をあてて、ポパイ、ジョー・クリスマス、エミリーを筆者なりに再考として分析した。とかく謎とされる人物像ばかりであり、かつての心理小説が有していた世界に登場し、読者が追体験をしながら、半ば主人公になりきって、それぞれの思いを描けるキャラクターとは程遠いのである。結

局のところ、犯罪心理学まで持ち出して、フォークナー自身が客観描写に徹しているのだから、その人物像を客観的に推察せざるを得なかった。その手法を駆使することで、彼がとんでもない洞察力をもって、現代社会を見通していたと断定する他になかったのである。心理学を専門としているわけでもないのに、アメリカのFBI犯罪捜査法「プロファイリング」なるものがあると知り、ポパイやジョー・クリスマスを多少なりとも、その人物像を解明するためには、もはやそれ以外にはないと判断せざるを得なかった。ドストエフスキーやトルストイが抽象的思考の怪物とすれば、フォークナーは「イメージラリー(Imagery)」の怪物と言えるだろう。本来象徴派的詩を創作していた彼ならではの想像力を発揮したのである。

ところで「3部作」はどうであろうかとなると、正直なところ筆者は戸惑いを憶えている。先に取り上げた作品は、フォークナーのストーリー・テラーとしての才能を遺憾なく発揮しており、物語の展開としてはなかなか妙味があり、いわばミステリー小説の要素も備えていて、追体験のおもしろみが無くても読みごたえがあった。ミステリー小説と考えればポパイやジョー・クリスマスもそれなりの重要な登場人物として、マイナス的存在価値を帯びてくる。ただ推理能力にすぐれた探偵なる主役がさっそうと登場するわけではないが。一方その後連作される「3部作」はどうであろうか。ここではフレム・スノープスなる登場人物が、ネガティブな主役として登場する。フォークナーの描く彼は相変わらず、客観描写に徹して描かれており、読者はその存在感を、ひしひしと認識しながらも、一体何者なのかと素朴な疑問にとられるのではなからうか。すでにすぐれた先達の方々が訳出され、そのヨクナパトファ・サガを見事に展開してもらふ恩恵にあずかれるにも関わらずである。その各作品の詳細な点について論じるのは、後の事にしたい。その理由としては、前述したようにスノープス一族とは何なのかという疑問はさらに深まってゆき、その傾向は作品を読み進めれば進める程、謎めいてくる存在と思われるからだ。

フレム・スノープス(ミンクが最初だと言われている)は、ヨクナパト

ファ郡ジェファーソンという町の東南のはずれにあたる、通称フレンチマンズ・ベンドと呼ばれる地域に登場するが、そのくだりは最初の作品『村』の冒頭に描かれている。彼はある日、突然ヴァーナーの店に現われ、皿洗いでいいから雇ってもらいたいと申し出、受け入れられると店の裏手の空地にテントを張って住みついた。ここにひとつのヒントがあると思われる。もともとアメリカは筆者もすでに論じたように、ヨーロッパやアジアから、移民達がそれぞれ違った理由があったが故に、困難な旅の果てに命からがらたどり着いた国である。それは周知の事実なのだが、その事情はかなり複雑なのだ。その歴史はバージニアのジェームズ・タウンへの移民から、ピューリタンのマサチューセッツ・プリマスへの渡来に始まったと言われているが、その同時期かそれ以前に、イギリス以外にスペインやフランスの探検家や移民がやってきている。さらにフロンティア・ラインがアメリカ・インディアンの存在に、ほとんどおかまいなしに西へと進んでゆき、中西部の北に幾万人にも及ぶアイルランド人、またその南にはシシリー人が到来した。一方、オランダ人、ドイツ人、ポーランド人も移民を開始し、果てには中国、日本、韓国人の移民にまでに及んでいった。そして、次から次と北米大陸に、そのほとんどの移民が「アメリカン・ドリーム」なるものを胸に抱いてやってきたわけだが、その中にピューリタンよりも先にやってきた「アカディア人（Acadia）」と呼ばれる民族がカナダの東海岸沿いに存在したことは、現代のアメリカ人ですら知らない人（恐らくミシシッピー・アラバマ州の南部を中心とした地域のアメリカ人は知っていると思われる）が大半だから、日本人だと尚さらだと思われる。もちろんアカディア系アメリカ人と呼ばれる人達であるが。

フォークナーも南部人として、アカディア人の存在を意識している事は、すでに初期の作品『サートリス』でも触れていて、筆者もその記述に興味を憶え小論の中で引用までしている。その時点ではアメリカがいかに多様な人種が寄り集まった、いわゆる「人種のるつぼ」であり、そこから、差別や衝突が生じる要因のひとつとして取り上げたに過ぎなかった。しかしながら、

「3部作」を読みながら、前述した如くスノープス一族の存在感 いわゆる「アメリカン・ドリーム」、つまり上昇志向の強烈さ、それも粘着質を持ち、陰湿な雰囲気を書かせている描写に何か苛立ちを憶えていた。いわゆるフランクなアメリカ性が皆無であり、華々しく音楽やスポーツや演技力の才能で、スターになるのとは、まったく正反対の描き方になっている。

もともと移民は新大陸における生活を安定させた時点で、新政府の一員と認識したとしても、自からのルーツは明らかであり、そのルーツである故国の風習や文化を、独自に主張し、守ろうとする傾向があるはずだ。だからイタリア系とかフランス系とかドイツ系という接頭語がアメリカ人の前につけられている。しかしながら、スノープス一族はどこか曖昧で、とらえどころのない一族だ。フレム・スノープスもその例外ではなく、フォークナーは正面きって彼を登場させることはしていない。もちろんアメリカ人はアメリカ人であり、アメリカ合衆国の市民権があれば、いちいち詮索する必要はないし、フォークナーも小説の登場人物達をいちいち何系などと解説しているわけではない(ケース by ケースであろうが)。ただ、多少なりとも作品論を述べ、その作品がもっている意味を述べなければならないとなると、その行動パターンの裏づけの根拠のひとつに加えなければならない場合もあるのではなかろうか。

前述したようにフレム・スノープスは忽然とフレンチマンズ・バンドに現われ、もともと何ら地位も財産もまったくない状態から、飽くなき上昇志向をもって、架空の町ジェファーソンといういち行政社会の中へ、巧妙に参入し、その地位と身分を確固たるものにする。もともとさしたる資産もなく、幌馬車でやってきた開拓農民ではないのだ。その出現の仕方はいわゆる「根無し草」の様相を呈しているところに注目する必要がある。スノープス一族のルーツを推定する前にもう少し、アメリカ移民の流れの源流部へ遡り、その確信を深めなければならないだろう。

## (2)

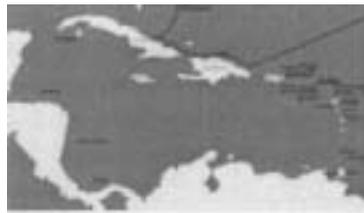
もともと南北アメリカ大陸の存在を、ヨーロッパ人が認識したのは、周知の如くクリストファー・コロンブスの確固たる決断力のおかげであろう。それは地動説か天動説かの問題よりも、重要であったのは地球が、円いか平らであるかであり、当時まだまだ、地球は平らであり、その涯にたどり着けばその向うで、奈落の底に落ちると信じられていた。最近封切りされた映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」のシリーズのひとつ“The end of the World”はまさにその説にふさわしいタイトルで一隻の船が、まるで巨大な瀑布のような水流の中を、木の葉の如く落下してゆく場面があった。その度肝を抜くようなシーンの持つ戦慄感は、当時の本来迷信深い船乗りならば、まだまだ信じて疑わない説であった。コロンブスはイタリア・ジェノヴァ出身となっているが、船乗りであったのか、商人であったのかよくわかっていない。父親が毛織物業を営んでいたらしいが、出身地もよくわかっていない。彼の後に続いて大西洋を横断し、歴史に名前を残した航海家は、まず出身や人種ははっきりしているが、コロンブスの謎めいたバックグラウンドは、どこか筆者にとってスノーブス的で、興味深い。ともかくも西廻りコースで、アメリカ大陸やカリブ海を目指した航海家は、もちろん金銀の財宝もしくは土地を見つけた功績によって、依頼された国の王から、爵位をもらって出世し、金持ちになる事を望んでいたもので、その上昇志向はコロンブスばかりではないが。

コロンブスは、通説ではインドへ向かうつもりで西へ船出し、ついに西インド諸島（現在のキューバやプエルトリコ等々数多くの島々）を発見したわけだが、その出来事はまさに奇跡的であった。コロンブスの航海の時代には、ほとんどの人々 - 船乗りや航海家 - はトスカネリの地球球体説を受け入れていたらしいが、誰も実証したわけではない。1492年8月3日に出航し、ほぼ2ヶ月近く経過した時、船員の不安がつのってきて小さな暴動が起きている。涯しなく続く大海原をくる日もくる日も、見つめていては当然の事であろう。

コロンブスは3日たって陸地を発見しなければ引き返さなければならなかったが、その3日目に同行のピンタ号の見張りが陸地を発見したのである。その瞬間、壮大なアメリカ大陸史が始まったのだった。その後、カスティーリャ（現在のスペイン）のイサベル一世とその夫フェルナンド五世に大陸到達（正確には島々）の報告をし、歓呼の礼でもって宮廷に迎え入れられ、そのうわさは船乗りを通じてまたたくまに広まり、港は群衆でごった返したようで、ヨーロッパ全体にそのニュースが伝わるのにもさしたる時間は、かからなかった。その後、自らの野望を果たすべく計四回にもわたって、コロンブスは長い航海へと乗りだし、飽くなき野望の権化と化した。当時彼の使用していた船（最初の船はサンタ・マリア号）は200トンたらずで、総乗組員90～120人ぐらいであった。つまり、長期間の航海に十分な食料も飲み水も積み込めないのである。もし補給できる陸地が見つからなければ、引き返したとしても何人生き残っていたであろうか。それに彼はインドへの距離をかなり短かく計算していたようである。コロンブスの使用した船はキャラック（Carrack）と呼ばれ、当時としては大型であるが、小廻りはきかなかつらしい。（写真参照）



A ship replica of the Santa Maria.



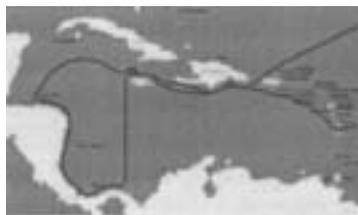
First voyage.



Second voyage.



Third voyage.



Fourth voyage.

(以上の写真は Wikipedia-Christopher Columbus の項のものを転用した)

ともかくも第一次航海で、陸地を発見できたコロンブスは、スペイン王から賞金を獲得し、発見地の提督職、その土地から上がる収益の10分の1を得る契約を交していたので、当然の事ながら、その後発見したイスパニョーラ島(後の航海者にとっても重要な島となる)に要塞を建設し、アメリカ大陸におけるスペイン初の植民地を作っている。当時の階級社会において、商人また船員であったコロンブスにとって、フェルナンド王とイサベル女王と交した契約は、もし彼が島々ないし大陸を発見すれば、大西洋の提督(admiral of the Atlantic Ocean)とあらゆる新天地の知事の地位を与えられる内容であった。コロンブスにとって、スパイスを手に入れて、利潤を得ることもあったが、社会的な高い身分を獲得する野望に燃えていたのである。前述したように、彼自ら信じていたインド発見の榮譽で迎えられた後、1493年9月24日、17隻の船に物資と1200人の農民や坑夫を乗せて、第二次航海へと出航し、Bの航路をたどっている。つまり、まさに植民地建設のためであり、コロンブスこそが、アメリカ大陸発見の冒険家だけではなく、開拓の父祖とも称するべき人物なのである。現在南米の反米派に、「コロンブスがわざわざ命がけで、アメリカ大陸にやって来なかったら、我々は迫害を受けることはなかっただろう。」と、アメリカ合衆国の「コロンブスの日」を拒否しているが、裏がえせばそれ程までに、コロンブスの航海なくして、今日のアメリカ大陸の国々は成立していなく、少数派にとっては迷惑な野心家であった。

ただ思惑通りにコロンブスはヨーロッパ人として初めての植民地建設の成

功者にはなり得なかった。彼がたどり着いた陸地はあくまでも島であり、すでに先住民がおり、最初は友好的であったとしても、狭い土地にヨーロッパ人が大挙して押しかけてきては、衝突は避けられなかった。戦いは勝利したが、先住民を捕え奴隷にしたことで、イサベル女王の不嬌をかい、コロンプスの統治に対して調査委員を送ってきたので、彼は本国へ釈明に帰ったりしている。当時は行政の一員である以上、反旗をひるがえす事を恐れて、常に為政者は監視の目を光らせており、同行の一員の中にも王直属の監視役が加わっていたらしい。かくしてコロンプスの植民地行政ははかどらなかつた。しかし彼は挫折することなく、1498年5月30日、3度目の航海へと出航し、まさに野望の鬼となっている。陸地発見の栄誉は得たものの何ら富を得ることもなく、せつかくの地位も失ないかけ、英雄どころか罪人になりかけたのである。天国から地獄へと彼は落ち入った状況であろう。その原因はやはり、一獲千金を夢みてやってきた入植者達が、現地の状況を把握し、コロンプス一族（弟のバルトロメ等が行政に加わっていた）へ反旗をひるがえしたうえに、彼は自分の命令に従わない乗組員を絞首刑にしたらしい。

ついに本国から査察官が、やってきて一族は本国へ送還された。コロンプスはスペインの王と王女に長い言訳の手紙を出して受け入れられ、自由の身となっている。ただここで注目すべきは、cの地図に明記しているように明らかに彼は、南米大陸のベネズエラあたりに一度到着していることだ。しかしながら彼には新大陸発見の認識はなく、中国大陸から突き出ている半島であると思い、あくまでもアジア近辺の海域に居るものと信じていたようである。もともとコロンプスは距離の単位を勘違いしており、地球の大きさを実際の2/3ぐらいであると思っていたので、すでにアジア近辺に居るものと信じていたのである。

コロンプスの悲劇的結末の要因はそのあたりにあると思われるが、彼はさらに第4次航海へと出航することになる。ただ基地であったヒスパニョーラ島への上陸は禁じられ、船団も縮少され、今までの地位を失なっていたにも関わらずである。1502年に出航し、dの航路を航行をしているが、ホンデユ

ラス、ニカラグア、コスタリカを經由し、10月にパナマに上陸している。今回もまた彼は、まさしく大陸にたどり着いているのだ。(相変わらず中国の南端だと思っていた) 今回のコロンブスは政治的な地位ではなく、探検家となって内地へと踏み込み、先住民から金や銀の話を聞きつけているが、まさしくアステカの事ではなからうか。また大海への海峡が南方にあることも耳にしている。パナマを横断すれば、その向こうに太平洋を発見することになったであろうが、彼にしてみればやはりアジアに居て、そこから莫大な富を得たい一心で、あちこちとさまよったと思われる。そしてパナマ周辺を航行中難破して、救助される羽目になり、それでも1504年11月にスペインに帰港できたのである。その後長年の余人にまねのできない舟乗り生活の疲れか、病の床にふせ、1506年5月20日に死去した。

以上概略的にコロンブスの大西洋横断とそのカリブ海近辺の海域の冒険は、実に次の「大航海時代 (The Age of Seafarer)」の父祖に値する行為であり、イタリア・ルネッサンス 機能不全的な中世社会から、新しい科学的知識を取り入れた近代へ飛躍せんとしていた時代 がもつエネルギーをまさに具現化したと言える。彼の人生は、その後登場した数々の名を残した航海者のあらゆるタイプを象徴化しているが、少なくともパイレーツではなかったであろう。しかし先住民にとってはそう言えなくもないだろう。

ところで、クリストファー・コロンブスを大航海時代の父祖と呼ぶことに、反論はないであろうが、彼とほぼ同時代の航海者がいたことに触れなければ、スノーブスにたどり着けない。彼の自己満足的な頭の回転の良さを十分に駆使できた時代が、到来するには気の遠くなるような時間が存在したのだ。

その主要な航海者とはアメリゴ・ヴェスプッチ Americus Vespucci (ラテン名) まさにその名前が新大陸に使われた人物なのである。その航海者としての姿は色摩力夫氏の著書『アメリゴ・ヴェスプッチ』に詳しく述べられているので、以下参照させてもらいたい。(尚、Wikipediaの「アメリゴ・ヴェスプッチ」の項目も参照している。)その限りにおいては、彼はコロンブスとはまさしく対照的な人物像で、しかも同時代の航海者なのだ。ところが、

新大陸の命名の榮譽はコロンブスに関係なくヴェスプッチの方になっていることで、後世のコロンブス派の学者の反感をかうことになった。ヴェスプッチの人となりについて次のように記述している。

アメリカゴは、フィレンツェの名家に生れた。しかも、イタリア・ルネッサンス最盛期のフィレンツェである。彼自身も、高度の人文主義的教育を受けている。あの大航海時代、コロンブスはじめ幾多の航海者の中で、抜群の教養人であったことは疑いない。アメリカゴは、富を求めていない。地位も求めていない。権力にも関心を示していない。彼の唯一の優越願望は、航海を通じて、学問の領域で人類にいささかの貢献をすることであった。

以上の一節に、コロンブス以後の多数の航海者とは一線を画すべき崇高なる人物像をうかがい知る事ができる。ヴェスプッチは大西洋を横断する航海にあたって、スペインやポルトガルの王室の援助と認可を求めてはいない。当時都市国家の最高実力者であったロレンツォ・ディ・ピエルフランチェスコ・ディ・メディチの庇護を受けての出航であり、その航海の記録は、公式のものでなく、メディチ宛の書簡によってたどる他はない。第六書簡まで、確認されていて第一書簡以外は、写本であり、第五、六書簡が、ヴェスプッチの生存中に印刷物として、出版されている。そして、ただ素直に書簡を受け入れた場合、彼もまた、コロンブス同様四回にわたって、アメリカ大陸に向けて航海しているのだ。先に引用した記述によれば、決してコロンブスにライバル心を燃やして、より榮譽を望んでいたわけではない人柄であると推察できるが、彼の冷静な行動力は、周囲がほうってはおけなかったのではなからうか。色摩氏によれば最大の問題は、第一書簡の記述が正しいとすれば、ヴェスプッチは、コロンブスよりも先にアメリカ大陸に到達していることになるからだ。次にその四回の航海について、引用させてもらおうと以下である。（Wikipediaの記述も合致している。）

第一航海（1497年 - 1498年）

中米、メキシコ湾、北米大陸東岸の一部

第二航海（1499年 - 1500年）

ブラジル北岸、カリブ海

第三航海（1501年 - 1502年）

南米大陸、東岸南緯五十度まで

第四航海（1503年 - 1504年）

南米大陸、東南北部

以上がヴェスプッチの航海の記録であるが、研究者によれば、第二航海と第三航海が、実際のものであるという説が、有力であるらしい。しかしながら、必ずしも功妙心にとらわれない彼の性格からすれば、書簡が本物ならば、明らかにコロンブスより先に、中米だけでなく北米大陸東岸にすら、到達していることになる。前記した如く、コロンブスは1498年5月に3度目の航海に出発し、南米ベネズエラのオリノコ川の河口に到着し、上陸を果たしているの、論争的となったわけである。ヴェスプッチのすべての航海が、真実なのかどうか、コロンブスより先にアメリカ大陸そのものに到達したのだろうか、以上の点については『アメリゴ・ヴェスプッチ』において詳細に述べられているので参照してもらいたい。ここではさしあたり、その点では追求する必要はない。いずれにせよヴェスプッチもまた偉大な航海者であることは疑いなく、その第五書簡、第六書簡は、「1507年の春、ライン河の近く、ロレーヌ地方ヴォージュの森の中にあるサン・ディエ修道院から、一冊の世界地理の本が出版された。『コスモグラフィエ・イントロドクティナ』（世界地理入門）である。その中で、新たに発見された世界第四の大陸を「アメリカ」と記入したのである、「アメリカ」は、勿論、アメリゴ・ヴェスプッチにあやかる名称である。この本は、大きな反響を呼び、またたく間にヨーロッパに普及した」原本となったのである。その状況はさらに、「その年の中に、七版を重ねた。各版一千部であるから、七千部が売れた。超ベスト・セラーだったのである。」と述べられている。まさにその印刷技術といい、

ルネッサンスから近代への息吹を感じさせる記述だ。その1507年に出版された『世界地理入門』はラテン語から、さらに各国の言語に翻訳され、「アメリカ」という言葉は、まるで光の矢のように、あちこちに飛び交ったのである。コロンブスがアジアと思い込んで、何とか利益と名誉を得るべく、奔走しているうちに、ヴェスプッチの「アメリカ」は、望む望まざるに関わらず、「大航海時代」への大いなる冒険の扉を開けることとなった。

「アメリカ」という呼称の是々非々は『世界地理入門』というひとつのマスコミ報道がもたらした論争で、ただ限られた社会の中の議論ではないところは、まるで現代社会の状況の原型とも言える。その口火はバルトロメ・ラス・カサス神父でスペインのドミニコ会修道士であり、著名な歴史家によってきられたようである。『アメリゴ・ヴェスプッチ』によればその攻撃ぶりは、周囲を巻き込み、辛らつを究めているが、ここでは引用を割愛させていただきたい。

ただ、ヴェスプッチの第一回航海が、事実なのかどうかは、さておき、何故彼が当時、論争的となってしまったのか、一部過激な批判者から「うそつき」呼ばわりされる事になったのかは、述べておかなければならないだろう。もちろん『アメリゴ・ヴェスプッチ』を参照させてもらってのことだが。著者は彼にどちらかと言えば親派の立場であるが、次の理由は容認すべきことではなかるうか。コロンブスにも関連するので引用させてもらおう。

トスカネリは、大航海時代の関係者に広く大きな影響を与えた。コロンブスの西方航海の発想も直接はトスカネリであった。コロンブスの伝記を書いた息子のフェルナンド（エルナンド）も、コロンブスはトスカネリに手紙を書いて教えを請うたと言っている。

その手紙にトスカネリは「香料の産するところで、普通には東方にあると言われている諸国を、西方と呼んだからと言って、いぶかしがらないでいただきたい。」と返信を送っているが、当時として最先端の地理学者であった。

ヴェスプッチはセビーリャ旅行の途中、ピサに立ち寄っている。ピサはトスカネリの出身地であったので、彼の死後（1482年）も弟子達によって地理学の研究は行われており、ヴェスプッチは地球球体説の教えを乞うたと考えられている。そこまでは自然科学的思考水準は、コロンブスと何ら差はないと思われる。もともと彼の家系には人文学者や外交官などを輩出しており、ヴェスプッチ家は代々公証人であった。どちらかと言えば文官肌であり、彼は学究肌であったようだ。コロンブスのように華々しく、活動的なところはなく、自己の大胆な航海について大げさに吹聴することもなかったので、謎の航海者と呼ばれているほどだ。派手に財宝を漁り、新大陸で広大な土地を確保せんとしたわけでもない。角度を変えれば、新大陸はほとんどの自然科学者にとっては、とんでもない新発見のためのフィールド・ワークの舞台となるわけだから、ある意味ではヴェスプッチはその分野の父祖と言える。動物学しかり、植物学しかり、鉱石学しかり、地理学しかり、気象学しかりだ。さらに先住民対象となれば文化人類学となるだろう。ヴェスプッチ自身は天文学と地理学に造詣が深く、いずれも当時の航海では必修の分野であった。やはり『アメリゴ・ヴェスプッチ』によると、彼の時代、航海術及び測定技術はヨーロッパ各国に普及しており、計器は原始的なものを使用していて、航海知識は『アルフォンソ王天文学表』を原典とし、その他イギリス人サクロポスコ著の『天体提要』、ドイツ人ミュラー著『天体位置表』、スペイン・サラマンカ大学教授サクト著『恒久年鑑』等々あり、それらの教養を得た、多彩な国籍の航海者が、同時に乗り込んでいたようで、海の上では船団は、国際化していたのである。

当時の計器航法に関して、ヴェスプッチの貢献があったと伝えられ、船上で天文観測に励んでいた様子は書簡の中でたびたび、語られていると著者は記述している。その行為は航行上、必要なことである。つまり「緯度」を計測でき、さしあたり北緯何度、南緯何度に居るかは特定できるが、もうひとつ重要な「経度」は、計測できない。「経度」の計測は時計の機能を持つ「マリン・クロノメーター」と呼ばれる器械が、発明される18世紀半ばまで待た

なければならなかった。それにも関わらずヴェスプッチは、地球の赤道にあたる周囲の距離の計算など、東西に船がどのくらい進んでいるのか判断する「経度」の測定も月のみちかけを観測したりしてかなり正確であったようで、その点では人文学者らしくコロンブスより、一枚上手であった。

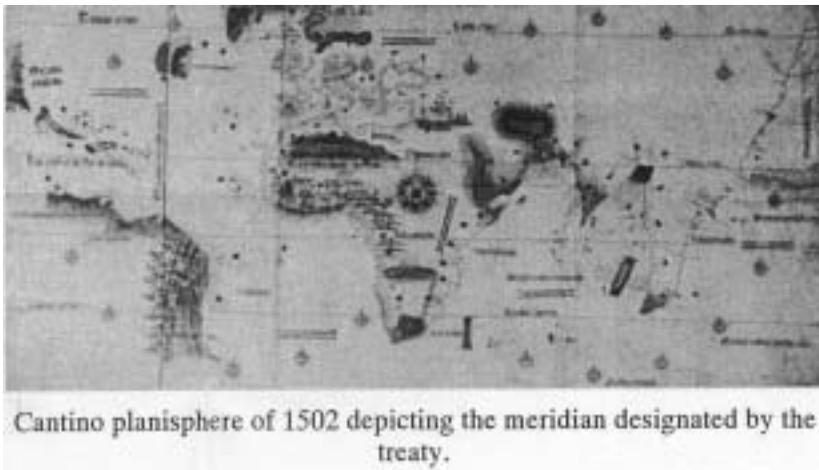
コロンブスとの相違を決定づける次のような記述がある。

サン・ディゴ修道院の地理学者達が、アメリカを新世界の発見者と認めたのは「発見」の日付を根拠とするものではなかった。アメリカが、その第三航海の結果、従来全く未知であった新しい巨大な大陸の存在にはじめて気がついたことである。そして、それを世界の第四の部分と認識し、「新世界」の呼称を打ち出したという事実である。コロンブスは死ぬまで自分が「発見」した大陸は日本付近であるかの如く信じていた。それ迄他の多くの航海者は、皆、たとえ多少の素朴な疑念があっても、やはり、アジアの一部に到着したものと考えていたのである。

ヴェスプッチは「経度」の測定も、かなり正確であっただけでなく、引用の大陸認識の確信具合から推するところ、北と南のアメリカ大陸の東岸を、北はフロリダ半島から、南は南緯五十度（マジェラン海峡より北へ約 1500 km）あたりまで、南下し、沿々と続く海岸線を望視航行し、時には接近して、アマゾン河の大河口のとてつもない水量から、自ら巨大な大陸の沿岸を航行しているのだと確信したのである。ただ、その当時、ポルトガルやスペインの航海者がブラジルにたどり着いた説が根強いので、相変わらずヴェスプッチの航海の真贋を問う傾向は、やはりポルトガル人やブラジル人の誇りに関わる故に、絶えることはないであろうが。

「大航海時代」への幕を開いたコロンブスやヴェスプッチ、その他多くの航海者が活躍した以前は、陸路つまり「シルク・ロード」で、ヨーロッパの国々はインドや中国へと交易のため向かったが、オスマン帝国が成立したためイスラム教徒の国へ、高い関税を払って通行しなくならなくなった。

しかしながらマルコ・ポーロの『東方見聞録』の影響もあって、ヨーロッパ人は東方との交易、特にスパイス（コショウ・クローブ等）が、肉料理等にどうしても必要だったのである。そして、海洋国ポルトガルとスペインは、ヨーロッパの西端になるので、アジアへは遠いが故、西廻りのコースを求めている。そのさし迫った事情がある時点で、コロンブスとヴェスプッチの大航海の達成があり、その実証に基づいて以下の公図が制作されたわけである。（Wikipedia「The Treaty of Tordecillas」の項より引用）



ヴェスプッチの航海の真否を、証明する方法として、当時、国家機密のひとつであった地図製作事業によって作図された古地図を、状況証拠として取り上げる歴史家が、存在する。上に引用した地図を一見する時、まさにこれから、「大航海時代」が始まろうとしている、強烈なエネルギーをひしひしと感ずるであろう。ブラジルの北東部と西インド諸島が、明らかに記入されており、ユカタン半島を含むパナマの部分は抜けている。注目すべきはキューバの北西部方向から、つき出ているのはフロリダ半島だと思われる。フロリダ半島は、ポンセ・ドウ・レオン（スペインの航海家）が、発見したというのが定説なのだが、それは 1512 年のことである。しかし、地図の製作年代は

1502年なので、ヴェスプッチの第一回航海は事実なのだろうかと思われる。ただ、航路図では、ユカタン半島沿岸も航行しているのに、その部分が御覧の通り空白になっているのが、不可解である。コロンブスがそちらの方面へと最後の航海を実行したのは1502年のことで、地図製作には間に合わなかったと推測するしかない。公式地図の製作は『アメリゴ・ヴェスプッチ』によれば、1500年のファン・デ・ラ・コサのスペイン公式地図から始まって、1502年、1503年、1507年、1508年、1511年及び1513年に、それぞれ新大陸の探検が進むにつれて、続々と製作されたようだが、残念ながらそれらの地図はいずれも、明示されていない。1503年の地図にパナマはあるかも知れない。

転用させてもらった古地図の東方の部分は、インドさらにマレーシア半島も、まだまだ不正確で、中国大陸の沿岸線は不明で、日本の存在もないのが、興味深い。もうひとつ重要なのは、第三航海では、ヴェスプッチは南アメリカ大陸の東岸を南緯50度まで、南下していたのだが、1500年から1502年までかかっているのに、間に合わなかったと考えられる。その点は、1503年及び1507年製作のものがない限り、何とも言えない。(ヴェスプッチの航路については、注の で『アメリゴ・ヴェスプッチ』より参考のため転用させてもらう。ヴェスプッチの特長は、上陸しての調査も大切だが、そこに行政の準備をすることではなく、スポンサーに指示されたことを実直に実践するが如く、とてつもない行程を航行し、原住民の生活状況、人種としてアフリカの原住民との肌の色の違い、河川の地理的報告、動植物の違い等々、「新世界」と判断を下し、その報告のみに終始しているところだ。アメリカ大陸発見への初期の段階において、コロンブスばかりが、話題にのぼってしまうが、ヴェスプッチも対極的に考えなければならぬと思う。社会は常に二立背反で、成り立つ宿命にあり、そのアメリカ的誕生期において、あまりにも象徴的なキャラクターの一端を荷っていると言えるのではないだろうか。

ところで、上記の古地図に関して、捕捉として述べておかなければならない。それは地図のいちばん左側に引いてある経線である。それはポルトガルとスペインの間で、ローマ法王を絡ませながら、政治的駆け引きによって、

最終的に決定したもので、トルデシ - リヤス条約 (The Treaty of Tordecillas) と呼ばれていた。当時、海洋先進国であった二国間のみの、スケールの大きい取り決めで、その経線の西側がスペイン、東側がポルトガルの権限圏であり、西経  $46^{\circ} 37'$  のところにある。まさに地球を中央で分割している経線にあり、コロンブスが第二次航海へと出発した後の 1494 年に締結されたもので、実際に政治的野心をもっていた彼にふさわしい、官割権問題に結着をつけたものであった。

フレイム・スノーブスに、たどり着くまで長々と述べているが、その後、数々の航海者が、華々しく登場し、注目を浴びるカリブ海だけではなく、カナダ側にも焦点をあて、探検家が輩出した事を述べた後に、いよいよアカデミア人渡来へと話を進めたい。(次回へ)

